

●苗立枯病予防

苗立枯病対策として、床土に焼土や人工培土を使用していない場合、タチガレエースM剤を使用してください。また、育苗期間中は、ハウス内温度が昼間30℃以上、夜間10℃以下にしない管理を行います。かん水などによってハウス内が蒸れないように適度に換気を行って下さい。適切な温度管理・水管理を行い、苗立枯病の発生を防ぎましょう。下記の表を参考に作業に合った農薬を使用しましょう。

使用時期	農薬名	使用量、希釈倍率	散布量(箱当たり)	使用方法
床土混和	タチガレエースM粉剤	6～8 g／箱	—	育苗培土に均一に混和
播種時	タチガレエースM液剤	1000倍	500ml	土壌灌注
		2000倍	1000ml	
発芽後	タチガレエースM液剤	500倍	500ml	
		1000倍		

※後作に野菜を作付する場合は箱粒剤を使用しないでください。

●被覆シートは天候に合わせて使い分けましょう

無加温出芽（べた置き）は今年の天候に合わせて、使用する保温資材を選びましょう。近年は、春先の寒暖の差が目立つため被覆シートの特徴を把握し、使い分けを行いながら対応しましょう。また、出芽するまでの間は被覆シートをかけた苗箱の床土に温度計を差し入れ、床土温度を管理しましょう。

被覆シートの特徴と注意点

資材名	効果	特徴及び注意点	資材の写真
ミラシート (白スポンジ系)	保温、保湿	適度な厚みがあり、保温効果に優れることから、低温が予想される場合は効果が高い。好天が続く場合は床土温度が急激に上昇しやすいため苗ヤケの発生に注意が必要。	
シルバーポリトウ (ポリ＋アルミ複合)	保温、保湿、遮光	表面のアルミにより遮熱効果があり床土の高温防止に役立つ。低温時にも保温効果が期待できる。被覆する際には裏表を確認する。床土温度が急激に上昇しやすいため苗ヤケの発生に注意が必要。	
太陽シート (反射系)	保温、通気、通水	高温時における急激な温度上昇を防ぎ、苗ヤケ等の高温障害を防止する。低温時は床土温度が上がりにくく出芽日数がかかりやすいので床土温度を上げる工夫が必要。	
ラブシート (不織布)	保温、保湿、遮熱	単独で使用する乾燥しやすい。他シートと組み合わせて使用する場合は、ラブシートは下に敷き、その上に他シートを被覆する。	

※出芽後の緑化期はラブシート、寒冷紗などを使用し、被覆シートを使用しての緑化は、控えてください。

ほ場が乾き次第、本田準備を行いましょう

昨秋収穫作業で苦勞したほ場では、田面に高低差や排水不良がおきている場合があります。雪融け水や雨水のたまり具合で高低差を確認し、田面の均平を行います。全体的に水がたまるほ場ではサブソイラを入れ、透水性の向上を図り下層まで根張りを良くします。畦畔の畦塗りを丁寧に行うことにより、漏水を防ぎ、深水管理を行うことが可能になります。

●清潔な環境で作業をしましょう

作業場内にある稲わらや籾殻には、病原菌が付着している場合があります、いもち病やばか苗病の伝染源になってしまいます。特に昨年、穂いもちの感染が見られたほ場の藁や籾殻には要注意です。種子予措作業に取り掛かる前に作業場内やその周辺を清掃します。

- ・配布された種子は直射日光の当たらない涼しく、清潔な場所で保管します。床に直接置くことは絶対に避けます。
- ・品種や消毒方法の違う種子を一緒に置かないようにします。
- ・種子予措、育苗作業に使用する器具や容器が保菌している可能性があるため、育苗資材の消毒を行います。
- ・浸種に使う水は水道水か、井戸水を使用します。
- ・複数品種や消毒方法の違う種子を同じ容器で浸種・催芽するのはやめます。
- ・周辺から病原菌が侵入するのを防ぐため、浸種・催芽時は容器にフタをします。
- ・浸種・催芽で使用する器具や容器は品種や、消毒方法が変わるごとに十分に洗浄します。



安心のネットワーク
NOSAI から

園芸施設共済

春の嵐に備えて

水稻育苗ハウスご加入を！



なんといつても
安心が一番！

例) 3間×10間 (30坪) の水稻育苗ハウス (新品)

補償金額 221,000円

掛金はわずか 1,315円 (2ヶ月の被覆)

※詳しくはNOSAIまで TEL 0187-63-1066

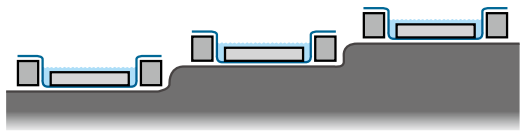
● プール育苗に取り組まれる方へ

プール育苗はハウスにビニールシートなどでプールを作り、苗が緑化期後1葉以上に生長したら水を入れて管理します。プール育苗を行うことで水管理や温度管理作業が軽減されるので、日中の管理が難しい方などにオススメです。また、もみ枯れ細菌病や苗立枯病の発病を抑制することができ、健苗育成や軽減栽培に役立ちます。

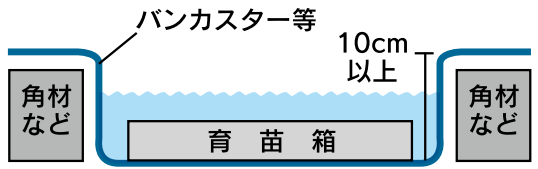
プール育苗を行うハウス内はできるだけ水平にし足跡が着かないよう鎮圧しましょう。育苗ハウスの傾斜が大きい場合は、プールを数段に区切るなどして、置き床を水平にします。

置き床の幅は育苗箱を並べる幅より5～10cm程度、広く取り土や角材などで8～10cm程度高くし、枠とします。プールには、水の漏れないビニール（ブルーシート・バンカスター等）を使用します。

プール内に育苗箱を並べる際は、発泡スチロールなどの上に乗りながら作業するなどして、ビニールを傷つけないように注意します。



●育苗ハウス内全体を水平に出来ない場合はハウスを細かく区切りながら敷物に合わせた水平な置き場を作ります。（例：1.5間～2間×3間の穴の開いていないビニールシートを準備しその部分を水平にする）。



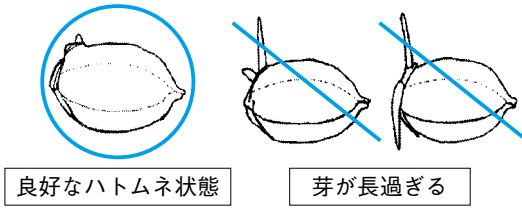
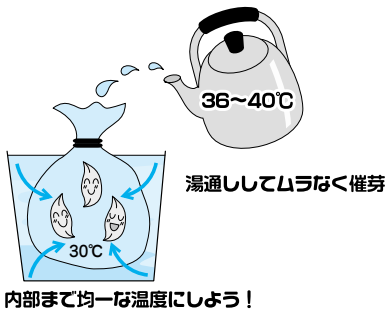
●ハウス内をできるだけ水平にならした後に、ビニールシート（バンカスター可）を敷き、育苗箱の周囲を土または角材等で押さえてプールを作ります。高さは10cm以上が理想。

● 催芽はていねいに行いましょう

催芽時には36～40℃のお湯で湯通しを行い、種子袋の内部まで均一な温度にし、その後30℃のお湯で催芽を行います。催芽中の水温が32℃を超えると籾枯れ細菌病などの病気にかかる危険性が高まるため、こまめに水温を見て温度調節を行います。

温湯消毒種子を使用する場合は、催芽時にタフブロック剤を使用し、防除効果を高めましょう。

ハトムネ状態で発芽を終了します。催芽時に芽を伸ばしすぎると、播種作業中に欠けてしまったり播種量のばらつきや播きムラ、出芽揃いの不均一化などの原因になるので注意しましょう。



● 使用器具の消毒

過去に、もみ枯れ細菌病やばか苗病を発生したことがある場合、病原菌が使用器具などに付着している場合があります。使用前に殺菌用資材：イチバンを使い器具の消毒を行います。

資 材 名	使 用 対 象	希 釈 倍 率	使 用 方 法
イ チ バ ン	育苗箱(木箱、プラスチック箱) 育苗ポット、支柱などの資材	500～1000倍	瞬時浸漬または散布

浸種と催芽は温度をこまめに確認しましょう

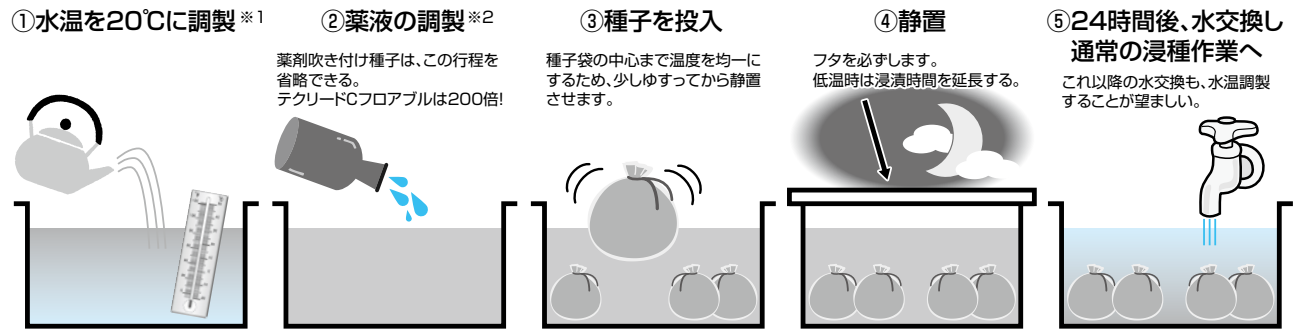
● 薬剤を効かせる浸種方法

薬剤吹き付け種子・塗沫済み種子は浸種により溶け出した薬剤を種粉が吸収することではじめて消毒効果が発揮されます。浸種開始時は温水等で水温を20℃に調整します。種粉を入れた後は10～15℃を目安に温度管理を行うと薬剤の効果が安定します。

水の量は種子1kgに対し水3.5ℓ程度とし、浸種開始から2日間は水の交換は行わず、1回目の水交換後、2～3日おきに水の交換を行います。浸種期間は水温が10℃の場合で6～8日程度とし、水交換時には必ず、籾の状態を確認し、籾袋の上下を入れ替えるなどして均一に吸水されるようにします。

浸種時にしっかりと籾に吸水させることにより、芽出しが揃います。十分に吸水した籾は胚が白く透けて見えるようになり、浸種の終了目安になります。

無消毒種子を消毒する場合は効果の高いテクリードCフロアブルを使用します。その場合も、初めの浸種水温を20℃程度にしてから種粉を浸けるようにしてください。



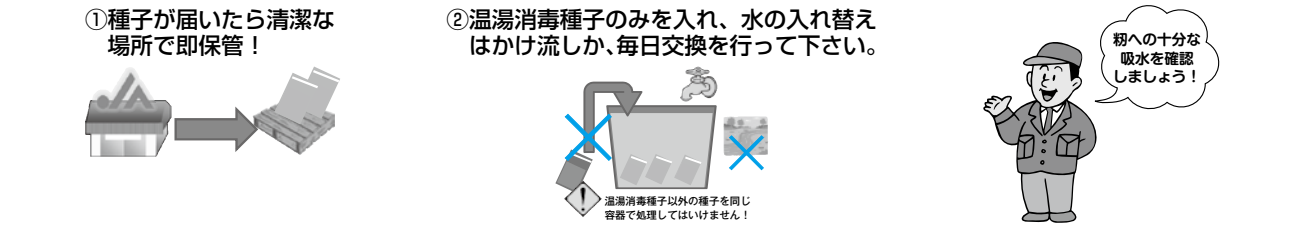
※1 種子を投入した際に水温が適温まで下がることを狙って、最初に少し高めの水温に調製します。
※2 ヘルシード剤、テクリード剤ともに浸種水温10℃以下では薬剤効果が不十分になったり生育抑制につながる場合があります。

● 温湯消毒種子取扱いの注意点

温湯消毒種子は殺菌の終了した無菌状態の種子なので、浸種後も種子を清潔に保つことが重要です。そのため、未殺菌種子の近くやムシロ、籾殻の近くでの保管は絶対にやめましょう。また、浸種・催芽に使用する水は水道水・井戸水を使い、水量は種子量の2倍以上になるようにします。

浸種の際、消毒方法の違う種子を同じ容器に入れ、浸種するのはやめましょう。催芽中は呼吸活動が活発なため、水は毎日交換または、掛け流しを行い、水温を10～15℃の範囲に保ちます。また、芽の動きが早い傾向にあるため籾を良く確認します。

※注意 浸種時、水循環は病原菌の増殖を助長させるため、絶対に行わないでください!!



タフブロック使用時の注意点

①タフブロックは催芽直前に200倍希釈液で24～48時間浸種、又は催芽と同時に200倍希釈液で24時間処理します（催芽状況により早めに終了する場合もあり、処理時間に注意する）。

②ダコレート・ベンレート播種時処理を行わないでください。

③苗箱施薬で嵐剤を使用する場合は、播種前後処理は行わない。